

日本イギリス哲学会 第43回 関西部会例会

日 時：2010年12月18日（土）13：00～17：40

場 所：キャンパスプラザ京都 京都大学サテライト講習室（6階・第8講習室）

交通アクセスは裏面の図でご確認ください。

報 告 1：13：00～14：25（討論を含む）

報 告 者：岸野 浩一（関西学院大学大学院 法学研究科博士課程後期課程）

題 目：デイヴィッド・ヒュームの安全保障理論

報 告 2：14：40～16：05（討論を含む）

報 告 者：鶴殿 慧（関西学院大学大学院 文学研究科博士課程）

題 目：ヒュームの因果推論に関する議論についての二つの解釈
—両者はいかにして調停されるべきであるのか？—

報 告 3：16：15～17：40（討論を含む）

報 告 者：古家 弘幸（徳島文理大学 総合政策学部）

題 目：アダム・スミスとストア哲学—キケロ『カトー』から商人地主像へ—

なお、各研究報告の要旨は、添付の別紙をご覧ください。

例会の後、簡単な懇親会を予定しております。こちらにもどうぞお気軽にご参加ください。

また、本年4月より部会担当理事が交代いたしました。どうぞよろしく願いいたします。
来年7月の部会報告をご希望の方は、以下の担当者あるいは事務局までお申し出ください。

関西部会担当

久米 暁（関西学院大学、exkume@kwansei.ac.jp）

竹澤 祐丈（京都大学、Takezawa@econ.kyoto-u.ac.jp）

◎を@に置き代えください。

<会場案内>

キャンパスプラザ京都 京都大学サテライト講習室（6階・第8講習室）

〒600-8216 京都市下京区西洞院通塩小路下る

（ビックカメラ前、JR 京都駅ビル駐車場西側）

TEL 075-353-9111



＜日本イギリス哲学会 第43回関西西部会例会 報告要旨＞

報告 1：デイヴィッド・ヒュームの安全保障理論

岸野 浩一

ヒュームの法と政治の哲学に関する研究では、国際政治に纏わる彼の勢力均衡論を、正義論や各種の政治経済論説と共に体系的かつ仔細に解釈する先行研究が長らく不在であった。しかし、近年、国内外のヒューム研究と国際政治理論研究において、国際関係に関するヒュームの議論に重点をおき、正義・統治・政治・経済に関する彼の著述を架橋しうる統合的解釈を導出しようとする研究が相次いで発表されている。本報告では、先行研究が示す、ヒュームの国際関係認識を含意する政治理論の解釈を批判的に検討し、社会の「安全」(safety)の保障(security)を軸とした、テキストとその論理に整合しうる一解釈を提起する。

本報告は、主に『人間本性論』3巻2部と『道徳原理探究』3章・4章、『論集』の各論説を参照し、テキストに内在する法と政治の論理を明らかにすることで、ヒュームの正義・政治・経済の諸論説において説かれている、「安全保障」の決定的必要性を析出する。

(関西学院大学大学院 法学研究科博士課程後期課程)

報告 2：ヒュームの因果推論に関する議論についての二つの解釈

—両者はいかにして調停されるべきであるのか?—

鵜殿 慧

『人間本性論』第一巻第三部第六節における、因果推論に関するヒュームの議論は周知の通り論争を呼ぶものである。類似の議論は、『人間知性探求』第四章第二部においても提示されている。この議論については代表的な二通りの解釈がある。一つは、最も古典的なもので、ヒュームの議論を因果推論の正当化に関わる議論とみなす規範的解釈と呼ばれるものである。しかし、近年、それに代わって支配的となりつつある記述心理学的解釈においては、ヒュームの議論はむしろ、我々がどのようにして因果推論を行うのかについての心理的事実の記述に関わるものとして理解されている。

現在も続いている二つの解釈の間の論争を調停するための一つの提案は、いずれの解釈が説得的であるかは使用するテキストに依存する、というものである。規範的解釈は、『人間本性論』の記述と適合的でないのに対して、『人間知性探求』の記述とある程度適合している、ということがしばしば指摘される。しかし、この種のテキスト相対性に訴える解決策は、安易に採用されるべきではない。本発表においては、二つのテキストにおけるヒュームの議論に共通する目的と構造を洗い出し、記述心理学的解釈と規範的解釈の双方における誤解を解消することによって、テキスト相対性に訴えるのとは別の方法による論争の調停を試みる。

(関西学院大学大学院 文学研究科博士課程)

(裏面に続く)

報告 3 : アダム・スミスとストア哲学—キケロ『カトー』から商人地主像へ—

古家 弘幸

本報告は、ストア哲学の言語が『道徳感情論』においてアダム・スミスの道徳哲学に導入され、やがて『国富論』でポリティカル・エコノミーの言語に発展していったプロセスに光を当てる。『国富論』でスミスは、とりわけキケロの『カトー、または老境について』を、優れたポリティカル・エコノミーの言語として参照した。老年には農業こそが喜びと利益をもたらし、自然の美を感じさせ、老年に最も相応しい職業となり、最大の富と美、徳を実現すると描いたキケロは、スミスにとって富と徳の両立可能性、マンドゥヴィル批判への新たな回路を指し示した。スミスは都市の商業から引退後に土地の改良に従事する「商人地主」像を、近代の商業社会で富の創出に最も貢献する有徳な階層として、キケロのカトーをモデルに描いた。キケロを通じたストア哲学の言語の使用は、ハチスンの道徳哲学をヒュームが既に破壊してしまった後の時代にあって、それでもスミスをしてヒューム的な懐疑論に陥ることなくマンドゥヴィル批判を可能にした戦略でもあった。本報告では、スミスのポリティカル・エコノミーの言語を、その産物として提示し検討する。

(徳島文理大学 総合政策学部)